

「世界を考える」

研究推進部長 丹生 憲一

アメリカ大統領の就任式があり、ジョー・バイデン氏が第46代大統領に就任しました。「自分に投票した人も、しなかった人も力を合わせてよい国にしていこう」というメッセージが印象的でした。式に参列している「マスクを着用した」人たちの「ソーシャルディスタンス」、演台から人が離れるたびに「消毒・殺菌」しているボディーガードが、今回の就任式を象徴していました。

カマラ・ハリス氏が「初の女性」副大統領となり（…そんな表現も性差別ではないかと思うのですが…）、トランプ氏のWHO脱退を撤回、気候変動への取り組みである「パリ協定」に復帰し…と新しい時代の到来も感じられます。新型コロナウイルスに対する対策にも、世界が一丸となって取り組んでいけるように新政権に期待したいところです。米商務省は「中国に対して台湾への圧力を停止し対話するよう促す」と、台湾との関係を維持していく意向であることが報じられました。「台湾とは国なのか」と考えてきた2年生（昨年考えた3年生）にとっては注目したいところですよ。

今週の金曜日には「地域課題から世界を考える日」が開催されます。昨年度は新型コロナウイルス感染防止のために中止され、今年度も丹波の森公苑ホールでの開催予定が、校内でのオンライン発表に変更されました。しかし、これはこれでオンラインであるがゆえに、他府県・海外の人にも見てもらえるようになりましたから、「禍を転じて福と為す」としたいものです。

先ほどの就任式に戻って…個人的にはレディ・ガガの国歌斉唱にしばれましたが、アマンダ・ゴーマンという詩人の朗読も心にみるものでした。（3年生には「総合Ⅲ」のまとめの中で詩の全文を配布予定です。）

For there is always light, if only we're brave enough to see it.
If only we're brave enough to be it.

光は常にある。それを見つめるだけの勇気があれば。

光になるという勇気さえあれば…

1月20日（水） 丹BAL1特別講義

知の探究コース1年生は、関西学院大学フェローの高畑由起夫先生から、今後の活動にむけてアドバイスをいただきました。

5時間目には1月29日に代表として発表する「丹波栗」班、「川裾祭」班がプレゼンテーションを行い、それに対する質疑応答・助言。栗について…「名産品というものは、地元の人が食べないことが多い」という観点から、「みなさんはブランド化したいのか？ 地元で食べてもらいたいのか？ どちら？」という質問。「全国のみなさんに価値を知ってもらうために、まずは自分たちが食べて魅力を知ることが必要だと思う」というのが答え。これに対し、「そのどちらを目指すかによってアンケートの問いの内容は変わってくる」と助言がありました。「高齢化が進み、後継者がいない原因は収入が低いことだと言っていたけど、具体的な数値をあげたほうが、説得力がある」とおっしゃいました。祭については「これまで聞いたことがなかったから、色々文献を調べたが、学術的論文は少ないので、研究としては面白い」と前置きをされたうえで、「全国各地に同じような祭りがあるから、『水でつながる人々の暮らし』のようなストーリーを作ればおもしろい」「日本人には、祭りを通じて穢を祓い、リセットするという風習がある。兵庫県の川の上流から、下流に流れていくイメージで調べてみては」と助言がありました。この後、全班的スライドについてコメントをいただき、海外のHPで「丹波竜」はどう見られているのか、ジビエ文化も海外のサイトから紹介。人口減少の解決として祭りを活用する提言例を、お話しいただきました。マンダラートという手法に触れながら、「大切なのは、色々なことを考えながら、それをいかに伝えたいことに集約していくかということ」と結んでいただいています。

「課題研究とは、みんなで一緒に考えること」

「どんなテーマでもおもしろい」という言葉が印象的でした。

楽しい探究活動を一緒に作っていきましょう！



「教科横断のことなど」

研究推進部 吉田 究

私たち研究推進部では、今、「教科横断」ってことを考えています。そもそもこの世の中のすべての事象は、どれをとっても、「これは物理」「これは国語」「これは地理」なんて割り切れるものじゃないのですから、高校の授業での学びは、複合的に関わって合っていて然るべきだと思うのです。

昨年末から探究や総合でキミたちの発表を聞いていると、例えば「グラフの作り方」とか「ポスターのデザイン」とか「説明の順序」とか「話すときの視線の配り方」とかについて、いろいろと感ずることがあるんです。でも、それ、それぞれの教科で教えるべきことなんだろう…？

「グラフの作り方」は数学や情報科もしれないし、「ポスターのデザイン」は情報？ 美術？ 「説明の順序」や「視線の配り方」は国語？ …なんて思うんだけど、いやいや、私の授業（国語）の中で、「視線の配り方」なんて教える機会、あるかなあ…？（国語表現ではやりますけど。）

これ、私たち教員が、それぞれ少しずつ自分の教科から外に越境すれば、容易くクリアできるんじゃないかと思うんです。そして、そのためには、私たちが他の教科（の先生の授業）に関心を持つこと。例えば国語を担当する私にしても、他の（教科の）先生方に対していつでも「ウェルカム♪」なムードを醸すこと。でもなあ、この（私を含めて）教師の「一国一城の主」的性格、なかなか手強いのです…。(苦笑)

11月の終わりに亀岡（シンポジウム「川から考えるみんなの未来」）に環境班（2年生1組の4名）を連れて行った話は前に書きました。そこで刺激的なアンケートに触れたってことまでは書きましたが、その詳細については紙幅が足らず、書けずにおりました。

私たち環境班が皆さんに協力してもらったレジ袋等に関するアンケートも実は相当凝って作った「自信作」のつもりでいたのですが、いやいや、ここでのアンケートにはまったく完敗でした。例えば、そこにはこんな質問項目が並ぶのです。

「3. 使い捨てプラスチックの中で減らしやすいものと減らしにくいものをお書きください。」

「4. 私たちが使い捨てをしなければならない理由は何だと思いますか？」

「4」の選択肢としては、「費用が安いから」「手間がかからないから」「処分が簡単だから」「衛生的だから」「入手しやすいから」「その他（ ）」。…これ、もうもはやアンケートじゃないですよねえ。(汗)

もちろん、一般の人(?)向けではなく、既に高い意識を持った人たちが集まる会だからこそその質問項目なのかもしれませんが、それにしても、刺激的ですよねえ。

アンケートのみならず、プリント等を作る場合も、余白とか、フォントとか、字のポイント数とか、パワーポイントならスライドのデザインとか、文字の量とか、アニメーションとか、そしてそこに貼る写真にしてもその構図とかトリミングとか、いくらでも気を遣うべきところはあるのです。できる人はそれができているし、できない人はそれに気付かなければいつまでもできない。

一つ一つのことを意味を持たせたいのです。感受性を育てたいのです。今やっているそれは一体何のためなのかと考える感覚を大事にしたい。

1月17日(日)、プロジェクト保津川主催のクリーン作戦に行ってきました。環境班のメンバーを連れて行くつもりでいたのですが、緊急事態宣言で断念。私一人が出掛けました。小一時間の活動で、軽トラ1台分のごみが。以前にお話を伺った保津川遊船企業組合の豊田知八理事長は、「社会の縮図でしょ？」と仰いましたが、ええ、まさに。レジ袋の断片も幾つも拾いましたが、確かにプラごみの総量からすれば2%に過ぎないのかもしれませんが、でも、これも豊田さん仰るとおり、「そのインパクトはすごい」。

これまでも繰り返し書いてきたことですが、自分の肌で感じ、そして考えること、意外と難しいんですよ。

